
からふるわーどっ！！

AM ヴィス TO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からふるわーるどっ！！

【Nコード】

N8835Z

【作者名】

AM ヴイス TO

【あらすじ】

その世界は俺に何をくれるのか。俺はその世界で何をするのか。色にあふれ、色を基軸とするその世界で、俺は家族を手に入れ、仲間を手に入れ……。そんなこんなでやってる今日もみんな楽しくていいなって思っっちゃうのが俺なんだけだな！
心の色でモンスターなどと心友^{しんゆう}を結び戦い旅をする世界へのトリック系らびゅこめでー！

序話

「すみません。はい。ありがとうございました。はい、では。」

「ふう・・・」

親戚の電話をおえて、俺は居間のソファに崩れ落ちた。未だに実感がわかない・・・。

「死んじまったん・・・だよな・・・。オヤジ・・・。」

オヤジが病気で死んでしまっってから一週間。親戚は心配してくれて電話やいろいろな世話を焼いてくれる。

母さんは俺が小さい頃にもともと病弱気味だったためなくなってしまった。それから男手一つで俺を育て上げてくれたオヤジこと黒乃^{くろの}隆^{たかし}は俺、遼^{しやう}が高校に上がってすぐ病気を患った。

「俺も母さんのところへ行くときが来たのか・・・。」なんてつぶやいていたが・・・。死んだ時は、言い方はおかしいかもしれないが、すごくあっさりとしていた。大切にしていた母さんとお揃いだったという水晶のはまったバングルを俺に渡したかと思うと、ゆっくりと息を引き取った。

「なんとか・・・やってみるしかねえな・・・。うしっ!」

パシッと頬を叩いて立ち上がる。俺は机の上においた二人のバングルを手に取り部屋へ向かった。

部屋に入ると、黒い煙が揺れていた。

「っ！！火事か！！？」

いや、ちがう。

それは、まるで炎のようにゆらめき、しかし深みの見えない黒さを
持っていた。

「なんだ・・・これ・・・」

思わず俺は手をだしてしまった。

俺の手が触れた瞬間、その煙のようなものは俺の腕にまとわりつき
全身を覆うかの勢いで俺の体に迫ってきた！！

ッ！！

声を出す暇もなく、俺はそれに飲み込まれてしまっていた。最後に
見たのは黒のなかにある真っ白な温かみを持つ煙だったというのを
俺はしばらくは思い出せなかったのも仕方なかったんだと思う。

一話

目が覚めると俺は森の中に倒れていた。

「なんじゃこりゃあああああ」

完璧におかしい。いや何がおかしいってあの部屋にあった黒い煙もそつだがここどこ！？　すごいうつそうとした森の中みたいだけど完全に俺部屋にいたはずなんだが！

約10分後

一通りパニックを起こした俺はため息をついた。

まずここがどこだかっていう問題はもう愚問だな。・・・わからない。

手持ち品　両親のバンブル。・・・のみ。

「遭難じゃん・・・。いやどこだかわからない場所にいきなり放り出されて遭難も何もないけどさ・・・。」

とにかく俺は歩いてみてこの森からどうにか抜け出す方法を探し始めることにした。

「腹・・・減った・・・。」

1時間弱歩き回った結果、周りの景色はほとんど変わらない上空腹

に苛まれていた。

「くそう・・・わかってるけど自分で状況整理すると辛いなあ・・・
もうわけわからん・・・？」

耳を澄ませるとサラサラと水の流れるような音がした。音のする方向に進むとそこには小さくはない小川が流れていた。

この川を下っていけばいつかは出られるんじゃないか？民家もあるかもしれない！

汚くもなさそうな水だったので軽く喉を潤し、元気を取り戻した俺は川を下っていった。

このときから違和感はあるたのだ。空腹感はあるたがそれだけで、歩きなれていない森の中を一時間弱も歩いて疲れさえ感じていなかったのだから。

・・・出た。・・・出れたああ！！ 森林？脱？出 シキラツ！
しかしここからとりあえず進むしかないんだよなあ・・・ここほんとどこなんだろう。煙に飲まれて来たから日本でもなし・・・まさかこれがいわゆる異世界トリップ！？

川を見つけたところから歩いて30分。結構あっさりと森を抜け、川沿いに進んでいた。

自分で思いついてしまった異世界説が否定できない中、俺はついに村を見つけた。

なんていうかね・・・うん。異世界・・・来ちゃったっぽい。

ここからでも軽く見える村の中には馬のように見えるが足が6本の生き物がいた。

・・・彘？何あれ。

よくわからない状況の中でも人がいたことに安心してしまい、気を抜いた俺は軽くしゃがみこんでため息をついた。顔を上げてとりあえずあの村に行こうとしたとき、後ろから何かが走ってくる音が聞こえ振り向くとそこには・・・

「お決まりのパターンってこういうのを言っんかね・・・。」

恐怖や驚きを通り越して俺はもう一度ため息をついた。走ってきてるのは、そう。狼だったのだ。

しかもここは異世界ということを示すかのようにその狼は体長1メートルはゆうに越しており、牙剥き出しで走ってきていた。

「うおおおっわああああああっ!？」

ハッとして横に転がってよけるが足を軽く爪に引き裂かれてズボンが敗れ、血が吹き出した。

痛てえつつつ!!!

軽くだったはずなのに激痛が走り立ち上がれない!!

方向転換をして狼は俺を喰らおうかとするように大口を開けて突っ込んでくる。

俺との距離がだんだんと縮んでいくが突然狼はスピードを緩め後ろをむいて大きな声で吠えた。

ヴォオオオオオオオオオオ

怖ええ！！！！

近くで聞いた狼の鳴き声は咆哮ともいえるほどのものだった。

よく見ると村から何人か人が出てきて武器を構えており、狼の近くには両刃の剣が落ちていた。さっきはこれを投げて狼の気をそらしたんだろう。

しかしながら狼には傷はついてなかった。しかし村の男の人は雄叫びを上げながら各々剣や斧、槍を構えて狼に襲いかかった。

大きな盾を持った人が狼の爪を弾いてひるませ、その隙に後ろから武器を持った人がでて殴りつけていく。さながら映画のようなそのシーンはしかし現実のものであって、盾で防ぎきらなかった爪を食らって村の人は吹き飛ばされて行く。

ついには盾を持った人が押し倒され、食いつかれようとしていた。

「あっ！」

ハッとした俺は思わず声をだして・・・後悔した。

こちらをむいた狼がまた俺を標的にして来たのだ。俺は思わず下に落ちていた剣を手にとったがこんなものもったこともなかったので剣先はふらふらだ。

近くまで来た狼はジャンプして俺に飛びかかり、おどろいた俺は屍餅を付いて上を見上げがむしゃらに剣を突き出した。

ザシュッ！！

肉を切り裂く音、血が吹き出る音。

そして狼は・・・あごしたから首の後ろにかけて剣で串刺しにされていた。

ドサツと横に狼を押しわけは出るが、狼の血をあびその臭いと、極度の緊張。それによって俺は村人が走ってくるのを見つつ、気を失った。

二話

「ん．．．ぐ．．．むう．．．」

「あ、めがさめたかいっ！あんたあーめえ覚ましたよ！！」

体を起こすとそこには女の人がいた。と、すぐに男の人も入ってきて俺の顔を見てホッとした。

「おお、起きたか。傷の手当はさせてもらったが、調子悪けりやすぐにいってくれ。っと自己紹介せにやならんな。俺の名前はドীগ・ balanだ。この村の村長なんてえもんをしている。こいつは妻のウルティナだ。」

「あ．．．はい。俺は黒乃、黒乃 遼です。手当ありがとうございます。」

「クロノ・リヨウか。んでリヨウよお、オメエその年であのボルテイモを倒すなんざやるじゃあねえか。お前のおかげで村の若けえもんがやられずに住んだって話だ。しかし、オメエさん一体どっから来たんだ？あっちの方角にはたしかリイノの森しかねえはずなんだが．．．。」

と balan さん（俺の名前をリヨウといったあたりからここでは前半が苗字ってことでいいんだろう）がまくし立ててくる。

あの狼はボルティモっていうのか。いやそれよりもだ、俺が異世界から来たって話をしてすぐに信じてもらえるだろうか．．．？昔読んだことのあるいわゆる異世界モノではバレるとその国の貴族やら

研究者やらに……って感じだった。この世界ではそうならないとは限らないし……

と俺が悩んでいるとウルティナさんが balan さんを後ろに引っ張っていった

「そんなに一気にまくし立てたって答え用がないじゃないかい！ごめんねえ、リヨウ……っていったかね。詳しい事情はおいおい聞かせてもらえると嬉しいんだけど、今はあれだろうぐっすり寝てたからお腹減ったんじゃないかねえ。」

途端、俺の腹は「ぐう」と情けない音を出した。

ウルティマさんはハツハツハと大笑いして「今つくるからねえ」と部屋を出ていった。……はずかしい。

いつの間にか balan さんも出ていったようで俺は一人になり、これから考える。

とりあえず俺の事情は今のところ聞かれてはいないが、話すわけにもいかないだろう。記憶喪失……とでもいっておくか……。しかし、どう生活していけばいいのか……。

と考えれば考えるだけ問題が出てくる。

俺がウンウンやっているとうるティナさんがよびに来た。

「うまい・・・っ!」

「そうかそうか。たくさん食べなっ。」

ウルティナさんが作ってくれたのはなんの野菜だかよくわからないがとにかくたくさんの野菜が入ったスープだった。空腹も相まってすごく美味しいっ。

結局3杯ほどおかわりして、落ち着いた頃、ウルティナさんは問いかけてきた。

「それで・・・リヨウ。いったいどうして森の方角からきたんだい？」

「それは、わからないんです。記憶がなくなってるみたいで・・・。自分の名前と少しの知識くらいしか頭になくて・・・。」

決めていたとおりに話す。この世界のことはほとんど知らないんだ、出るボロもないだろう。」

「そうかい・・・。そりゃさぞ苦労したんだろうねえ・・・。こんなわかそうなのに親ともはぐれちまってるようで・・・。っとうし たんだい!？」

ん？と俺はふと顔に手をやるとそこには水滴が。・・・涙？

「もしかして・・・親・・・いないのかい？」

「くっ・・・」

こらえきれずオヤジの顔が頭に浮かぶ。・・・まずい、記憶喪失つてことにしてるのに・・・

と、ふとやわらかなここに陥った。

「ウルティナ・・・さん？」

俺はウルティナさんの胸に抱きしめられており、あたまをなでられていた。

「いろいろ複雑な事情があったみたいだねえ・・・。そうだ、よかったらうちに住むことにするかい？記憶が戻るにしても住むところがあれだろう。いろいろと教えていつてやるからさ。その内に記憶ももどるかもしれないか。ねえあんた。」

「ん・・・？おお、俺は大歓迎だが・・・」

だが・・・？なにかまずいことでもあるんだろうか。・・・俺はやはりよそのものだし、

「だが、畑仕事なんかも手伝ってもらうからな！ボルティモを倒したおまえの腕力、あてにしてんぜ。」

とニカツつと笑ってくれる balan さん。

「うあ、・・・あはいっ！」

恥ずかしいことに俺の顔は涙でぐしゃぐしゃになってしまったみた

い
だ
・
・
・
。

三話

泣きじゃくったその日は balan さんの家の納屋をちよこつと改築して俺の部屋を作ってもらい、ぐっすりと眠らせてもらった。

翌日。朝ごはんをもらってから、俺は農具を担いで、balan さんの後につづき畑があるという場所までついて行った。

後ろを歩いていると、balan さんの身長、というより体型はまさに巨躯だった。俺の身長が165とちょっとで、見上げるほどの身長。横幅は俺の倍以上ありそうだ。

畑につくと、すでに作業をしてる人がちらほら見える。俺が農具を置くと、こっちに駆け寄ってくる人がいた。うつすらと覚えがある。その顔は昨日の盾を構えていた人のようだ。

「おはようございます村長。そっちの方は・・・昨日の。」

「おう、こいつぁクロノ・リョウってんだ。記憶がねえみたいでな、しばらくうちに預かることにした。」

「そうなんですか。あつ僕の名前はトウマです。ルーツ・トウマ。昨日は僕がやられそうになってた時に気を引いていただいて・・・」

「

俺は首をぶるんぶるんと振る。見た感じ20代前半男の人に頭を下げられるなど慣れていない。それに昨日のは意図してやったわけじゃないのだ。

「じゃありヨウ。最初はこのトウマについて行ってくれるか。トウマ、リヨウに手伝わせるからいろいろ教えてやってくれ。畑のことだけじゃなくて、いろいろな。」

俺とトウマさんは同時に「はい」と返事をして顔を合わせて笑顔を浮かべた。とつつきやすそうな人だな。

「まずは畑をほって耕すことから始めようか。しばらくはこの作業をするんだ。」

とトウマさんはひろーい畑を見渡す。周りでは様々な人が木の棒のようなもので土を耕している。おそらくはここでこの村全体の食料をとっているんだろう。見た感じだと科学的なレベルはすごくひくいようだ。

「ここには村で飼ってるあのボウロンをはなして糞をさせて、この肥料にしてるんだ。」

と6本足の馬のようなものを指す。あれはボウロンというのか。

「いつもはこの時期になるとボウロンを小屋にしまっただけ、その時のあのボルティモに何匹もやられてたんだ。今年は君のおかげで一匹もかけることなく、この作業に入ることができるよ。」

とまた感謝されつつも俺たちは作業を開始した。農具の技術も発達していないのか、耕す道具はこの棒なので、すぐたいへんそうだ。あまり無茶すると言われるので軽くトウマさんと話しながら

進めていく。

「トウマさん、この村ってどこかの国に属してるとかは・・・？」

「さんずけなんてやめてくれよ。同じ村に住む仲間なんだ。ふむ・
・国か。まず大まかなところから話していくことにしよう。何か思
い出せそうならなんでも聞いてくれ。」

俺が頷くとトウマは話し始めた。

「この世界は大きく分けて4つの国で構成されている。っていつて
も領土の奪い合いとかはやってないよ。すごい昔にはあったって言
われてるけど、今の国の形態になってからはまったくだね。大陸は
2つあってこう左右に分かれてるんだ。」

と、地面に耕し棒で左右に半分から別れた大陸を書く。

「右側の上半分がライロス国。下半分がアングルシア国。左側上半
分がメディナ国。下半分がレグルス国さ。この四つの国はそれぞれ
人の名前が国名になってて、この4人はそれぞれの国の初代王であ
り、共に戦った仲間でもある。この戦った相手というのがルシフェ
リアという人なんだけど、この人については人間なのか、魔物なの
か、死んだのかさえわかってないんだ。名前しか伝えられていない
というね。まあそういうことがあるから、4つの国は常に良好な関
係を結んでいるってわけ。それで、さっきの質問で、ここの村はレ
グルス国の最南端リイノの森。君が来た方向にある森だね。そこに
一番近い村、その名もドーグ村さ。」

と、ここまで語ってトウマは他に質問は？とこっちを見る。

俺が悩みながら土を耕しているとそうだと、トウマはこっちを向く

「君の心の色はどうなんだろう・・・？」

髪の毛を見ながらそうつぶやいたトウマはじゃあ別の説明を始めた。

「心の色・・・と聞いて何も思い出すことはないみたいだね。見てくれ。僕の髪の毛の色はみずいろだろう？これは心の色と呼ばれる体内魔力の色が出てきたものなんだ。体内魔力？って顔をしてるねそれも話しておこう。体内魔力というのはそのまんまの意味。体内にある魔力のことだよ。これは色をしめすだけのものなんだけど、これが重要だ。この世界には彩晶というものがある。世界中にあり、しかしなかなか見つけれられるものではない。この彩晶をもった状態で心の色が細かい状態まで同じものを持つ者同士が心友という契約を結ぶことができ、心友となったものは心が通い合い、お互いを最も信頼できるパートナーとなることができるんだ。その心の色を示すのが体内魔力ってこと。多くは髪の毛に浮かび上がることができるけど、世代を飛ばして遺伝することもあるから正確じゃない。それを測るためのものもあるけど・・・今はまだこの話はいいかな。」

とトウマは言葉を区切る。何か思い出したかい？とも言うように。俺は首を振りながら内心すごくワクワクしていた。心の色をそろえたものが心友となって信頼できるパートナーとなる。・・・すごくいい。

と、俺はトウマに気になった疑問を告げる。

「体内魔力って言うってたけど、それ以外に魔力ってあるってこと？」

「ああ、うん。それもあるよ。体外魔力、これは単純に魔力って呼ばれるかマナとも呼ばれるものなんだけど、こっちは個人所有量つてものがあって主に魔法だね。炎を出したり、水を出したり……。便利なものなんだけど、たいていの人はほとんど所有量はないんだ。媒体がないと人じゃあ使用することもできないしね。僕のお父さんは一定魔力所持者。つまり魔法使いで、一番近くの街、ルーンテナーってところで働いてるんだ。これも魔力を測る道具があつてこの村の人も定期的に来る行商人の人に測ってもらったことがあるけどほとんどのないらしいね。」

僕もお父さんの道具を触らせてもらったときにやってみたけど、露程度も水が出なかったよ。と苦笑してトウマは説明を終えた。

途中からドキドキが止まらなかった。俺も魔法が使えるかもしれないと思うと言葉にできない何かがウズウズと好奇心を刺激してくる。

「さてと、もう少しして終了の時間だ。いっちょやっちゃいましょうか。」

とトウマは棒を持ち直す。俺も気を取り直してガスガスと土を耕していた。

balanさんが呼びに来るまでものすごい勢いで仕事を片付けたため、まわりの村の人にはすごい驚かれたようだ。

四話

「よし、きょうはここまでにしておくか。」

畑に畝を作り、野菜を植える準備までしたところで balan さんが声をだした。

初めてここの畑で農作業をした時から早二週間。足の怪我が直ぐに治った俺は村の人たちと同じくらいの量の仕事をこなせるようになり、いろいろな人たちと沢山話をして、なかよくなっていた。

「え？狩りですか？」

トウマと一緒に終了後の雑談していると村の屈強な男たち3人とひとりの女の人がちかづいてきて、その中の一人の男、ジャックさんが狩りにいくかと誘ってきた。

「いいじゃないカリヨウ。行っておいでよ。ジャックさんは力もあるし、周りを見て統率もできる。そのメンバーもそれなりの腕を持ってるし、危険はないよ。」

たしかに男たちは強そうというのはわかるが・・・

と、俺の視線に気づいたのか女の人、フィファナさん（18歳）はこちらを一瞥して言い放った。

「あんたうちが力ないでも思ってるのかい？少なくともあんたよりはあるように見えるけどねえ。」

ジャックさんたちボルティマと戦ったメンバーは「ああ・・・まあ仕方ないよな」と俺の体を見る。まあ、俺見た目は普通の一般人レベルの肉体だし、畑仕事がいっぱいっぱいだと思われるんだろう。

「まあどっちもいきやわかるだろうさ。いくつてことでいいよなあ？ボウズ。」

「はい。行きます。それで、何を？」

「ああ、クルトウをな。村の在庫がなくなりそうなんだ。」

クルトウというのは山にいる鶏みたいな鳥のことだ。使い勝手が良く、どう調理しても美味しい肉だ。

「お前さんの武器は何かいい？斧と剣、あとは弓があつたな。」

ジャックさんたちがいろいろ武器を言ってくるので、俺は「じゃあ剣で」と返事をして一旦家に帰ることにする。

俺はオヤジのバングルをはめて母さんのバングルに行つてくると声をかけてから家をでた。

集合場所に指定された村の入口にはもうみんなが揃っていた。

「おおきたかボウズ。んじゃ行くとすつか。場所はここから30分ほどの小さな森だ。」

そういえば時間の単位などは俺の世界と一緒にあったなあと思う。俺自身は腕時計などは持つてきては居なかったが balan さんの家には

時計があつた。それには文字盤が12個あつてもとの世界と何ら変わりない様子だった。しかし、この世界に来てから言葉は通じても文字がよめなったりするのはなにかきつと翻訳してくれる的なものが作用してるんだろぅが、どうせならもじもよめるようにしてほしかったなあと思う。

そんなこんなで森に到着するとジャックさんは声を上げた。

「よーしついたぜ。おつとボウズこいつは剣だ。」

「あ、ありがとうございます。」

「今からだとだいたい3時間ほどやってから帰るとちょうど暗くなる程度だな。じゃあお前らは慣れてるから二人であつちのほう。俺とフィ嬢とボウズはこっちだ。最低でも10匹はとってこいよ。んじゃ解散。」

二人と別れて、俺たちは森の中に入った。少し進んだところで近くの茂みからクルトウが一匹抜けていった。

「フツ!!」

俺が駆け出そうとするとフィファナさんが俺より先にクルトウにかけより、首に短刀をかけてひくように切り裂いた。クルトウは声も挙げずに物言わぬ骸となった。

「こんなものか。」

すげえ・・・フィファナさんが首に短刀をかけるまでクルトウは気づいてない様子だったぞ!?

「おお、さすがだなあ。んじゃオレらも負けられないようにするぞ！坊主は木の実でもとってウルティナさんにもって行ってやると喜ぶんじゃないねえか？」

俺は頷き、歩を進める。しばらく行つたところで、赤い木の実がなっている茂みを見つけそこで実をついばんでいるクルトウ3匹を見つけた。

「一人一匹づつとこだ。行くぞ！」

それぞれに駆け寄つた俺たちは武器を構える。俺が狙つたクルトウは運悪く食事を終えただったようで、こちらを振り向き俺に気づくと「ぐうえぐうえ」と鳴き声を上げる。

「わるいなつと。」

剣を振り下ろすが、クルトウは素早い拳動で横に避けて俺に向かって嘴で攻撃してくる。

ギギギギギギギイッ！！！！

「うおおう！？　ツクー！！」

剣を横に構えて攻撃をつけ、思いつき振り抜く。吹っ飛んでいくクルトウ。だが空中でホバリングして体制を立て直すときれいに着地をした。

「鶏みたいなくせにとべるのかよッ」

俺はつぶやきながら攻めに転じ、今度は避けられないよう鋭く剣を突き出す。クルトウは飛んで逃げようとしたが、俺は軌道を上にずらし、クルトウを串刺しにした。

「ふう・・・」

と周りを見ると二人ともすでに終わっていた。見たところジャックさんは一撃で叩き伏せ、ファイアさんはさっきと同様にしてクルトウを倒していたようだ。

「遅かったじゃない。そんなもんなの？」

ファイアさんに言われながら俺はジャックさんの言うとおりに死体の処理をして、木の実を集めた。

その後は団体を見つけたり、個別に木の実などをあつめたりして集合の時間までには12匹と袋いっぱいの木の実を手に入れることができた俺たちは集合場所で待っていた。

「うーん・・・あいつらおせえなあ・・・。遅れるんじゃない？もうちょっとあとで焼き入れておかねえと。」

「目標の数が仕留められなくて慌ててるんじゃない？もうちょっと待ちましようよ。」

とジャックさんのつぶやきにファイアさんが軽口を入れていると、向こうの方から二人が急いで走ってきた。

「おせえぞ！・・・どうしたんだ！」

片方の人は右腕から血を流していて、持っていた槍が折れているようだった。慌ててジャックさんが手当てをする。

「ベアルスがでてっ・・・ゼエゼエ・・・こいつ攻撃一発もらったけどっ・・・ゼハアなんとか逃げてきてっ」

「ベアルスだと！？おかしいなここらには出てこなかったはずだがッ！まさか、ボルティモが倒されて、ここらへんの縄張りに変化でも出たのか！？」

とジャックさんが叫ぶと、それに重ねたようにドドドドドドドと地響きが聞こえ、3メートルは超すほどの大きなクマが走ってきた。

「ベアルスっ、くそ、このままじゃ！」

と、ジャックさんが立ち上がって剣を取るがそれより先にベアルスの方へ走っていく影があった。

「ファイファナさん！！！」

彼女は、小石をベアルスに投げて気を引くと後ろに回り込んで短刀を背中に突き立てた。

「っ！？」

しかし、ベアルスの毛皮に阻まれて体まで通らなかったのかすぐに離れようとするファイファナさん。が、ベアルスは振り向きざまに彼女をつかみあげる。

「くっ！」

俺は咄嗟に走り込んで行くがふと思う。

俺がかなう相手か？

いや、そんなことを考えてる暇はない。彼女を助けなくては。

「きゃああっ」

つかみあげ、叩きつけられて叫ぶフィファナさんを助けるため、俺は剣をぶん投じた。

ズンッ！

よし、深く刺さったっ。

しかし、ベアルスは怒り心頭な様子で、俺に向かって右腕を振り下ろす。

「うおおおおらっ！」

俺はこの世界に来て異様に強くなっていた腕力を信じ、拳を突き上げる。

ベアルスの爪が俺に届く直前に俺の拳はベアルスの手首にあたり、「ゴキュッ」と骨の折れる音がする

ヴヴァアアアアア

大きな叫び声を上げて、去っていくベアルス。

「ダイジョブですか！？フィファナさん！」

俺はがくがくする膝に根性をいれ、フィファナさんのもとへいくと彼女も腰が抜けたようにヘタリ込みんでいる。

「ボウズツ！無茶するんじゃないやあねえ！」

とジャックさんと二人が駆け寄ってきて叫ぶ。

「俺はだいじょぶなんで、フィファナさんを」

とジャックさんにフィファナさんを担いでもらい、村へ帰る準備をする。

帰りはただ無言だった。時折、フィファナさんや、怪我をしたおとこのひとに大丈夫かと

ジャックさんが声をかける程度だった。

村につくと、すぐに解散となった。

「お前たちは直ぐに帰って手当をしる。ボウズも見た目は大丈夫だが、どうなるかわからんなからな。安静にな。」

みんなは返事をする。と帰路についたが、フィファナさんがちらりとこつちをむいて

「あとで・・・お礼、いく・・・から。じゃね。」

とボソリといって帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8835z/>

からふるわーどっ！！

2011年12月31日18時52分発行